knowing me, knowing you 世界のアートの知の技法：
オルタナティブなアートスクール／ラーニング・プログラムのリサーチ
［稲垣立男編］レポート

2022 年 9 月 25 日（日）13 時 30 分～15 時
会場｜愛知芸術文化センター アートプラザ内ビデオルーム
参加者｜7 名

「knowing me, knowing you 世界のアートの地の技法」の第 2 回目は、フィールドワークをベースとした作品制作や教育活動を続けてきた稲垣立男さんをゲストに、『芸術実践とフィールドワーク 人類学的方法による美術と美術教育』と題し、フィールドワークとアート、そして教育効果との関係性について、国内外の豊富な事例を参照しながらご紹介いただきました。

稲垣さんは国内外のさまざまな地域で制作活動や教育プログラムを実践し続けています。大学院生のときに実施したプロジェクトがその重要な起点となっていました。

1989 年、多摩美術大学の大学院生だった稲垣さんは、他の学生たちと共同で「表現の現場展 ‘89」を企画しました。アンデパンダン（無審査）の方式での展覧会と、美術関係者と学生によるシンポジウム「発表の場を巡って」を実施しました。稲垣さんはこの企画を中心となって動かし、シンポジウムでは、各科の学生が 1 人ずつパネリストとなり、ギャラリストや学芸員、批評家などとディスカッションを行いました。社会と美術の間をどうつなぐか、ということを大きなテーマとして展開させたこの企画は、稲垣さん自身にとっても大きなインパクトがあったものでした。

80 年代、90 年代は「美しい、精度の高いオブジェクトをつくり出す」という芸術のあり方から、たとえばリレーショナル・アート (1) や、ソーシャリー・エンゲイジド・アート (2) といった、関係性に注目した新しいアートのかたちが登場してきた時代でした。そうした流れの中、表現の可能性や、いかに活動を継続していくのかといったことを、社会と美術のつながりから考えてみることは、この時代に生きていた若いアーティストたちにとって、非常に重要で差し迫ったものでもありました。

アートのかたちが変化し、その価値観や可能性が大きく展開してきた時代、ワークショップをとりいれた活動を展開していたアーティストの一人に宮前正樹がいます。2000 年に 43 歳という若さで亡くなりますが、その先駆的な活動は多くのアーティストに影響を与えました。ラーニングキュレーターの山本高之さんもその一人。稲垣さんは、この宮前正樹を取り上げた展覧会「宮前正樹とワークショップ展」(3) を 2015 年に実施しました。

北海道にある稚内北星学園大学（現・育英大学）で新しいコースの立ち上げに関わった宮前ですが、実際にカリキュラムを実践していく前に亡くなってしまいます。その後任として着任したのが稲垣さんでした。他の教員とともに宮前が考案していたカリキュラムを実現させるため、さまざまな資料にあたり、宮前自身について研究を深めていくことになりました。2015 年の展覧会はそうした研究、フィールドワークのまとめとも言えます。宮前正樹を研究したことによっても、稲垣さんがずっと身を置いてきた社会と美術の関係性やコミュニケーションなどについて、思考や態度を整理することにつながっているようでした。

(1) 1990 年代後半に提唱されるようになったアートのあり方。「関係性の芸術」。アートと日常は対立するものではなく、相互に関係してこそ成立し得るという考え方に基づく。

(2) 1990 年代以降、リレーショナル・アートから派生的に生まれた。アーティストが対話や討論をおこなったり、地域コミュニティに参加したりすることで、社会的価値観の変革を促す。作品制作がゴールではなく、アーティストが他者と協働するその活動自体がアートとして成立する。

(3) 「黄金町バザール 2015」で実施された。宮前正樹の資料と、生前交流のあったアーティストたちが滞在制作をおこなったり、宮前の活動について語るトークなどを実施。
http://koganecho.net/koganecho-bazaar-2015/artproject/artproject01.html

「表現の現場‘89」で新しいアートの可能性について具体的なアクションを起こした稲垣さんは、その3年後に「VIVA EXCON」と出会うことになります。偶然が重なって参加することになり、展覧会の詳細もフィリピンという国や地域の情報もほとんどない状態で飛び込んだと言います。しかし、意外にも「VIVA EXCON」には「表現の現場展‘89」との共通点がありました。

小さな島々からなるビサヤ地方で行われる「VIVA EXCON」は、地域のアーティスト同士が交流を深め、コミュニティの文化を醸造することを目的に開催されています。稲垣さんが参加した1992年の「VIVA EXCON」では、カンファレンスと展覧会がセットになり、「表現の現場展‘89」と同じように、作品をみせることと意見を交わし合うことが同時に行われていました。

土地の様子や文化的背景、アートに対する態度や思考の差異など、初めて国際展に参加した稲垣さんには衝撃的なことばかりだったと言います。しかし、その衝撃をすぐに吸収し、考える方向を見極めて進んでいかなければいけませんでした。そうした濃密な時間を若い時に経験したことによって、文化的な背景の異なるコミュニティを理解することや、作品として成果を社会に還元していくことについて意識していくようになりました。

「VIVA EXCON」が大きなきっかけになり、その後国内外でさまざまなプロジェクトを実施していくことになりますが、現在も含めてその活動には「フィールドワーク」が常に大きな位置を占めています。

フィールドワークとは人類学の分野でよく使われる手法です。現地に実際に赴き、調査対象を直接観察したり、関係者などに聞き取りを行ったり、資料などを収集したりして、学術的にまとめていく方法です。しかし90年代後半になると西洋的な思想に偏っているとして、その手法そのものが批判を受けるようになっていきます。一方で、同時代、アートの世界ではフィールドワークをベースとした新しいかたちや考え方が登場してきます。

人類学者であるティム・インゴルド（1948年 - ）は、人類学の目的を、民族誌を纏めることではなく、教育的なものであると考えました。フィールドワークとは、ただ外側から対象を見つめることではなく、観察を通して自分の価値観や思想が変化していく自己変容を促すものであり、さらに、それが他者との関わりの中で起こり、相互に変容し学んでいくことに積極的に関わることであると言っています。

経験を通した学びについては、ジョン・デューイ（1859年 -1952年）が先駆的で、インゴルドも参照しています。教育学者であるデューイは『経験と教育』（初版1938年）のなかで、教育者にとって必要なことは、「連続的な成長を促進させるような経験」を一人一人が持つことができるように、「いまの経験」を整えることだとしています。経験するための土台をどのように設定できるかとも言えますが、このデューイの態度やインゴルドの考え方は、リレーショナル・アートやソーシャリー・エンゲイジド・アートともつながっています。

「はじめから、こうした人たちや考え方を知った状態で、活動をしてきたわけじゃない。でも、振り返ると、自分がやってきたことはこうした考え方に基づいていたんだ、と意識するようになった。」という稲垣さん。実践例の紹介ではご自身の制作活動と、美術教育という視点で取り組んだ活動の2つに分けてお話しいただきました。

90年代の稲垣さんの作品は、干潟に残った海鳥の足跡や、街中に散在する何気ない物などが作品のきっかけになるなど、「場所」との関係に注目したものが中心でした。2000年前後になると、人とのコミュニケーションが土台となった作品が生まれていきます。国立公園のなかにある村の人たちにそこで経験したことを聞き、エピソードを書いた看板を立てた作品や、偶然から知ることになったアマチュア画家の博物館をつくった喜多方市の作品など、フィールドワークを基礎に、地域の人々やコミュニティとの関わりから作品が生み出されていきました。

美術教育としての実践例では、フィリピン、イタリア、チェコでの活動が紹介されました。稲垣さんは、1992年に初めて参加して以来、「VIVA EXCON」には何度も関わってきましたが、2018年には地元のアーティストや学生たちに向けた教育プログラムを実施しました。プログラムを通して、彼らからの2つのアイデアが作品として発表されました。1つは、地元の人々の思い出や現状などをインタビューしシェアする作品。もう一つは、ラップバト

ルを開催するステージの制作で、地域の若いミュージシャンや若者たちが集う場を生み出しました。どちらも地元のコミュニティと深く関わった作品となりました。

2017 年には、イタリアの人類学者からの呼びかけで、イタリアのキアロモンテで人類学者とアーティストのためのプロジェクト「Community Residency for Artist & Anthropologists」を行いました。

公募によって集まった人類学者とアーティストでペアをつくり、フィールドワークを行い、その成果を作品として発表しました。ワークショップを実施したペアもあり、村で調査した食べ物や料理を前に、それらに関する発表を村人の前で行い、間違いを指摘してもらったり道具の使い方を教えてもらうなど、相互のやり取りを行いました。

チェコの西ボヘミア大学では、文人画とコンセプチュアルアートをテーマにしたワークショップを 2018 年に実施しました。文化人や政治家などが、自身の信念や思考などを視覚で訴えかける芸術作品として表現したのが、文人画のはじまりです。アイデアを伝えるための手法としてコンセプチュアルアートと結びつけ、学生たちには情報を操作したり、身体を意識させるなどのワークショップを通して、アイデアを伝える手法について考える機会を創出しました。

稲垣さんの活動に一貫しているフィールドワークに対する態度について、背景からその考え方の土台を知り、実践例からその手法がもたらす教育的な効果について考えをつなげることができました。

（レポート松村淳子）